

小金井雑学大学

第 27 号 令和 2 年 1 月

だより

生涯学習と公民館

小金井雑学大学 代表理事 五十嵐 京子

新年おめでとうございます。令和となって初めてのお正月をご家族そろってお迎えのことと存じます。今年は東京オリンピック・パラリンピックがあり、スポーツへの関心は否応なく高まる年になるでしょう。

さて、小金井市には公民館が 5 館あり、他市に先駆けて企画実行委員制度を導入し、市民参加を進めてきたという歴史を持っています。かつて戦後の混乱期には、民間の力も弱く、行政が社会教育の場として公民館を住民の学びの拠点としてきた時代もありました。次第に、市民自身も育ち、民間の力も発揮されるようになり、行政が主導で社会教育を実施する時代から、自ら生涯学習として選択していく時代に変化し、公民館でも部屋を借りて市民自身が運営し活動する団体が増えてきました。

そして、今や新しい課題が出てきており、核家族化、一人暮らし高齢者の増加、災害への備え等を背景に地域の繋がりを強くしていく必要が叫ばれており、公民館への期待はそちらに移りつつあるようです。地域の繋がり等の問題を地域で解決する拠点ということになると、既に、武蔵野市や三鷹市では以前から公民館ではなくコミュニティセンターを作り、住民自治の元に運営をされています。片方で、公民館は教育委員会の所管ということになると、どちらが目的を達成するために効果的かの検証が必要ではないかと思えます。

そして、そうした社会が求めることとは別に、「生涯学習」という課題は永遠にあるので、公民館が変化していったとき、生涯学習はどのように展開されれば、誰もが学べる社会になるのかを考える必要があります。そして、さらにその内容について基礎自治体はどこまで把握し、支援できるのかも検討されなければならない課題です。

情報があふれる時代に、生きる力をつけるための学びはどのように確保されるべきか、私たちが共に考えて行きましょう。



「小金井雑学大学だより」のバックナンバー（カラー）は
小金井雑学大学の WEB サイトでお読みいただけます。

小金井雑学大学



木の良さとは ー住まいづくりの現場からー

株式会社タカキ 取締役副社長 高木 聡

2019年6月「木の良さとはー住まいづくりの現場から」というテーマでお話する機会を頂きました。はじめに木がその柔らかな触感や香りなどにより人の身体や心に与える効能や素材としての性能について大学等の研究などを交えてお伝えしました。続いて森林資源世界第2位である日本ではその森林資源が利用期にあること、一方で日本の住宅着工見込みは今後遞減していくこと、また木造建築の担い手である大工さんがその住宅着工の減よりも速いスピードで減っていくことをご報告しました。



第488回講義 06月02日

そのような課題を抱えている中で①住宅だけでなく、幼稚園や老健施設、店舗、工場などの中大規模施設を木構造で建築する取り組み②大工育成（東京大工塾）や大工負担軽減のための新規事業など、私の会社での取り組みをご紹介します。

小金井の材木屋の息子に生まれながら家業を継ぐ意思なく銀行員になっていた自分が、皆さんの前で木について話す機会を頂くなどは考えてもいませんでした。今回自らの取り組みについて小金井雑学大学でお話しする機会を頂けたことは、家業に戻りまだまだ成長しなければならない身として最高の学びになりました。

現在私は2015年から始まった「夏休み木工チャレンジ」の実行委員長を務めています。このイベントの目的は『子どもたち、そして地域に暮らす人たちとともに①モノ創りの楽しさ大切さを感じる②木に触れ木と親しむ③地域でのつながりを広げる』ことです。その目的達成に向かって挑戦しています。運営にあらゆる層の大人や学生の応援が必要です。2020年はボランティアを募集する予定です。よかったですらぜひご協力ください。

最後になりましたが、今回貴重な機会を頂きましたことに心より感謝申し上げますとともに、小金井雑学大学の今後益々のご発展を祈念申し上げます。



22周年記念講演のお知らせ

「オーバーツーリズムの課題～観光公害についての対応～」

北村嵩氏(観光情報協会理事、元JTB取締役・松蔭大学教授、)

■日時：3月15日 14時～15時30分 終了後祝賀会開催(参加費3,000円)

■会場：萌え木ホールA室(商工会館3階)

創作された二枚橋の伝説

小金井市文化財センター学芸員 多田 哲

南小に通う小学生だった頃、郷土の歴史教育の一環として、「二枚橋の由来」の伝説を盛んに聞かされた。二枚橋ごみ焼却場の入り口には、昭和 57 年に建てた掲示板があったので、ご存じの方も多であろう。解説文の大筋は以下のようなものであった。

染谷の庄屋の息子と小金井の山守の娘が恋仲になったが、庄屋の怒りを買って、実らぬ恋と諦めた二人は野川に身を投げた。大蛇と化した娘の怨霊が幻の丸木橋に化けて、一つの橋を二つに見せて、村人を惑わし川に落とした。庄屋は大木を挽き割り、二枚の橋を架けて供養した。以後、橋は二枚橋と呼ばれるようになった云々という、おそらくは江戸期に時代設定をした話である。



第 491 回講義 第 494 回講義

改めて出来過ぎた感があるこの伝説を検証してみると、多々、首を傾げざるを得ない。もし、地元伝わっていたとするなら、「庄屋」ではなく「名主」であろう。当然、言い伝えを残した旧家や土地の古老がいたはずなのだが、聞いた試しがない。或いはそのベースとなった伝承を載せた古文書があって然るべきだが、文字化された初見は私の知る限り戦後の昭和 40 年代で、それ以上遡れない。昭和 53 年には『小金井市誌VI 今昔ばなし編』に採用されるが、市誌編さん委員長皆木繁宏(1905～1999)が書いたあとがきが全てを物語っている。あとがきには「二枚橋の由来」を含む伝説十編について、次のように説明している。

巻末の伝説十編は、個人として書いたものです。元来、小金井には、いわゆる伝説というものは少なく、書き残されているものに至ってはきわめて少ないのです。それに、伝説というものは、十人書けば十いろになる性質のもので、これは、筆者流の伝説だと、承知していただきたい。断続的にある史実や伝説をつなぎあわせて書いたものや、筆者の想像で分析して書いたものもあります。ともかく、うそで固めたものではないが、事実であるとは申しません。ご批判を願います。

これを読めば二枚橋の伝説は、皆木繁宏が創作したと考えるのが自然であろう。道成寺伝説を改変して、舞台を二枚橋に置き換えたのは言うまでもない。この本は他の項目でも、創作した物語と実際にあった出来事や実在の土地・人物を緋い交ぜにしているので注意を要する。

いくら伝説とはいえ、伝承者不在の戦後の創作では心許ない限りである。それに比べれば、二枚橋から野川を遡った四割橋（現在の中前橋）の東にあった四割堰の名の由来は明らか。小金井の代表的地方文書のひとつ、明和 3 年(1766)の『小金井村むら加々美年代記』にその原典となる記述がある。鈴木家三代目が四人の息子に田畑を四等分、つまり「田分け」をしたと簡潔に書かれている。当時の常識である長子相続からすれば、「たわけ者」と呼ばれてもおかしくない民主的分割相続は異例の措置であろう。二枚橋の伝説のように起伏に富んだストーリーは無いものの、こちらの方に私は興味が惹かれる。

海の環境問題 - マイクロプラスチック汚染とは

国際基督教大学 名誉教授 吉野 輝雄

「海の環境問題 - マイクロプラスチック汚染とは」について講演させていただいた。講演内容は、以下の概要とスライド原稿の通りです。

<http://subsites.icu.ac.jp/people/yoshino/ResumeMicroplasticProblem2019.pdf>

<http://subsites.icu.ac.jp/people/yoshino/MicroPlaSeaPollutionTY2019.pdf>

ポイントは、

- 今起こっている（廃プラ）環境汚染問題を具体的に示す。
- 科学(化学、生物学)の基本に立って現実を考える。
- 生活環境に関わる明と暗の部分を見つめる。
- これからの課題（Think globally, act locally：地球的視野をもって考え、置かれた場所で行動する／足元の課題に取り組む）に向き合う。また、国連が策定した SDG s (持続可能な開発目標) を世界共通の課題とし、国を超え、国内では国県市長村の行政課題、企業の達成課題として受け止め、2030年達成を目指して具体的な動きが広がれば未来に希望がもてる、とアピールさせて頂いた。



第 493 回講義 08 月 18 日

マイクロプラスチックによる海洋汚染について考えるために、まず、人工合成された高

分子(プラ)と天然高分子が自然界に廃棄された後の違いに注目。天然物は昆虫や微生物により生分解されて他の生物の栄養物となるが、廃プラは細粉されるだけで殆ど分解されない。これがゴミとして残り、海洋生物に摂取され生命を脅かし、生態系に異変につながる事が問題となっている。この問題への対策は、プラ使用の削減(Reduce)である事を強調。地元の東京農工大が「プラ削減 5R キャンパス」活動宣言を表明し、具体的課題に取り組み始めた英断を紹介した。

今や地球レベルの対応が緊急課題

● 対応の基本は、3R

Reduce/削減 >
Reuse/再利用 >
Recycle/原料に再生
あるいは他の物質に変換

3Rに乗らないプラ廃棄物は焼却する。

● この対応を世界共通の認識とする

編集後記

今回第 27 号より雑学便りを読みやすくするためにリニューアルしました。そして便りの発行も増やすことを検討しております。次号もお楽しみに。

さて、雑学大学では講師を募集しております。講義内容は講師の先生のお仕事やご活動により様々で、多方面からの題材でお話しいただいております。ご応募お待ちしております。

事務局 田中 留美子

発行責任者 五十嵐京子